

団体名：(財)日本科学協会

事業名：教育・研究図書有効活用プロジェクト

< 総合評価 >

日本科学協会は、明確な目的意識と熱意をもってプロジェクトを推進しており、プロジェクトの中核的な事業である図書寄贈事業との相乗効果を意識しながら、日本知識クイズ大会、作文コンクール、日本招聘といった事業を展開してきた。目的を達成するのに必要なプロセスを構築し、継続的にプロセスの改善を行うとともに、体制も整えてきたことから、累計 220 万冊超の図書を寄贈し、寄贈した図書は有効に活用されている。また、その他の事業でも成果を上げ、さまざまな社会的成果も上げている。

プロジェクトのゴールイメージを明確にしていくことが今後の課題となっているものの、総括的にみると、すぐれた事業が運営されていると評価できる。

< 会計評価 >

評価項目は概ね適正に処理・管理されている。

< 事業プロセスの評価 >

< すぐれている点 >

- 日本科学協会は、中国国内の大学生を中心とする青年層の日本への理解を深めるとともに、友好意識を高めるという明確な目的意識と熱意をもってプロジェクトを展開している。また、プロジェクトの中心事業である図書寄贈事業との相乗効果を発揮することを意識しながら、日本知識クイズ大会、日本語での作文コンクール、図書館職員招聘事業が実施されている。
- 日本語の図書が活用される可能性が高いという観点から、中国に対象を絞るとともに、寄贈対象大学ごとに「図書寄贈方針」を策定、これに基づいて図書を収集寄贈するなど、図書が寄贈先において有効に活用されるような仕組みを構築している。
- 毎年、寄贈図書 1 冊あたりのコストを算出しており、高いコスト意識を持ってコスト低減への工夫を行いながら事業を実施している。
- プロジェクトに長く関わる職員の存在により事務局にノウハウが蓄積され、事業を円滑に推進する体制が整えられているとともに、寄贈対象大学等プロジェクトに関連する各機関の日本科学協会事務局に対する信頼が厚い。
- 日本知識クイズ大会および作文コンクールは、日本科学協会と中国国内の大学・マスコミ企業が共催しており、事業を円滑かつ効果的に推進できる体制となっている。
- 図書寄贈事業において、中継校を通して対象先に寄贈する体制を整えたことにより、中国国内における通関手続きを簡便化するなど、中国側の事情に応じてフローを改善している。

< 改善にむけての課題 >

- プロジェクトのゴールイメージを描くことにより、他国への展開を含めた今後の事業展開を明確にしていくことが望まれる。
- 図書提供元へのより細やかなフィードバックを通して、図書寄贈へのモチベーションを高めていく認識を持ち、工夫していくことが望まれる。
- 今後も継続して安定的に図書を収集していくうえで、図書寄贈元との直接的なパイプを有する人材をプロジェクト推進委員に登用することが望まれる。

< 事業成果の評価 >

< すぐれている点 >

- 図書寄贈対象大学とその学生、日本知識クイズ大会参加者、日本招聘事業参加者、各事業の関連先など、本プロジェクトと関わりを持った個人・組織における本プロジェクトに対する評価は総じて高く、日本への理解の深化・友好意識の向上に一定の役割を果たした。
- 図書寄贈事業は、寄贈開始当初から 2008 年度までに累計 220 万冊超の図書を寄贈した実績を作るとともに、日本から中国に大量の図書を寄贈するというスキームを構築した。寄贈図書は、日本語を学習している学生を中心に活用されている。また、寄贈図書 1 冊あたりのコストは毎年、低減している。
- 日本知識クイズ大会は、日本語を学習する学生が日本語能力と日本に対する知識を検証する場として教員や学生から認識され、中国の大学側で積極的に実施され、広がりを見せている。
- 作文コンクールに関連して、中国の地域社会にインパクトを与えた事例が生じている。また、作文コンクールは中国政府より、2008 年「中日青少年友好交流年」事業、2009 年「中日青少年友好交流活動」に正式に認定された。
- 図書館担当者日本招聘プログラムは、参加者から図書館運営上、非常に役に立つものであると評価されている。
- 図書寄贈事業は、リサイクルなど環境問題の観点や情報資源の保存・有効活用の観点から有効であると評価されている。

< 改善にむけての課題 >

- 寄贈対象大学から、学術的な図書や専門性の高い図書への要望が寄せられている。
- 日本語で応募する作文コンクールの応募件数が 271 件と少なく、今後、応募件数の増加に向けて工夫を行う余地がある。
- 日本語の図書が大量に寄贈されることにより、寄贈対象大学の中には、自発的に日本語の図書の蔵書を行わなくなっている大学もある。

< 資金効率評価 >

寄贈図書 1 冊あたりのコスト (2008 年度 78.6 円) は、毎年、低減されており、図書寄贈事業における資金効率は向上しているものと評価できる。

< 今後の方向性 >

図書寄贈事業を中心とする本プロジェクトは、中国において着実に広がりを見せるとともに、相応の実績・成果を上げてきた。これを踏まえて、今後、日本科学協会では、中国における本プロジェクトのゴールイメージを明確にすること、および、ゴールイメージに基づいた事業展開 (中国以外の国への展開も含む) についての検討を行い、プロジェクトの目指す姿を明確にしていくことが望まれる。